

巨大古墳の考古学 抄

「蝶の雑記帳 109b」

ローランド・エノス著『「木」から辿る人類史』を読んで、多くのものを受けとった。教えられたことや感想は「蝶の雑記帳 109」に記したが、この付録で、現在考え中の日本古代史に対してヒントになることを書きとめておきたい。

北西ヨーロッパで見つまっている墳丘墓やヘンジなどの古代遺跡のことである。それらは、古代日本列島の古墳時代につくられた巨大古墳と比較することができる。現在の大阪府にある大山古墳は、前方後円墳の長さ・面積と後円部の直径・高さがそれぞれ約 525m・12ha と 286m・40m あり、菅田山古墳は前方後円墳の長さ 425m で後円部の直径・高さが 425m・35m あり、しばしばピラミッドと対比して語られる。しかし、イングランドやアイルランドでは、早くも新石器時代に石室や石づくりの通路をもち土で覆った古墳がつくられた。紀元前 3000 年ころのアイルランドの大きな円墳は、直径 76m 高さ 12m 面積 0.4ha で、奥行き 18m の石積み通路の奥に三つの石室があった（冬至の朝陽が通路に射し込む）。その種の建造物で最大のものが紀元前 2300 年ころイングランドのシルベリーで建造された。その円墳は直径 167m 高さ 39m で面積が 2.1ha もあった。切り出したチョークのブロックをらせん状に積みあげほかの石で隙間を埋めて、その表面を粘土でぬって防水したという。上のデータは Wikipedia を見て補足してある。

さて、日本の前方後円墳には、シルベリー・ヒルとくらべればなるほど巨大で建造に数倍の労力を必要としたと考えられるものがある。しかし、一方は農耕生活をしていたとはいえ新石器時代の建造物で、前方後円墳はそれから 2500 年以上あとの鉄器時代につくられた。イングランドのまだ新石器時代に区分される農耕文明では、その円墳をつくった地域の人口はそれほど多くなく、社会の組織も後世にくらべれば強力なものではなかっただろう。

日本の古墳時代には、集約的な水稲栽培が相当の段階に進んで、人口密度も高かったはずである（水稲栽培地域は小麦などの栽培地域よりもたいてい人口密度が高かった）。水田の開発が進んだ地域では、大きな古墳をつくるのに十分な人口と統率力が生まれたと考えてよい。大阪府の巨大古墳ほどではないが、今の宮崎県・岡山県・関東などに大きな古墳が築かれたことがそれを教える。現代の平均的な県域をこえるほどでない地域でそれらの古墳は築かれたのである。広い河内湖と湿地に流れてきた土が堆積するのを水田に変えていった現在の大阪府では、いっそう集約的な開発が行なわれ、強い支配力が生まれたと推測することができる。そして、『記・紀』が記述するようなら、その大阪平野と先進の奈良盆地および周辺を合わせて支配する王権ができて、ほかの地域に勝る古墳を築いたとしてもおかしくない。前方後円墳も斜面を大きな石ころで覆っていたと考えられている。しかし、

内部の石室などはおおよそ同程度だとして、大量だけれども近くの泥を掘り上げ近郷の石ころも運ぶ工事と、規模は小さいけれども墳丘をつくり金属器なしで白亜(石灰石)を大量に切り出して運び墳丘を覆う工事とを比較して、必要な総労働力にどのくらいの差があったかは専門的な検討を要する問題である。いずれにせよ、古墳時代の列島の一つの地域は新石器時代後期のシルベリーよりも多くの労働力を動員できたことは確かだろう。

大阪府に残っている巨大古墳は、それを建造した支配者が倭国の王だったという有力な証拠とされるのであるが、上での比較検討は、巨大古墳が領域国家の王権の十分な証拠ではないことを教える。日本古代史の現行パラダイムが依拠する考古学的な根拠は薄弱なのである。

このことは、中華帝国は別格として、倭国と質的に同程度であったと考えられる朝鮮半島の高句麗・百済・新羅とくらべてみれば明らかになる。四国は 300 年代末には領域国家と呼べるような体制に近づいていた。少なくとも、その覇権はそれぞれの領域に及んでいたと考えることができる。それが高句麗の広開土王碑に書かれた朝鮮半島での四国のからまる戦争状態である。高句麗は 427 年に南の平城に遷都し、強大な高句麗に押された百済は、479 年に熊津にさらに 538 年に泗沘に遷都した。新羅は新羅全域を支配するようになる前から金城を都とした。だから、遅くとも 500 年代から 100 年

以上、朝鮮半島の三国は王都を一か所に定めて国家を經營したのである。そして、互いに戦争をした。ところが『日本書紀』は大和の王権が王の代ごとに宮を遷したと書く。それは、大和の王権が競り合っている朝鮮半島の三国とずいぶん異なる状態だったことを示している。

最も強大だった高句麗でも、大和の王権が築いたほどの巨大な古墳をつくらなかった。それよりも王都を整備し領国の支配を強固にすることの方が重要だった、ということだろう。いつも敵対する二国と倭国に対する構えを強固にし、財力を必要とする戦争に備える必要があったのである。大きな人力と財力を必要とする巨大な古墳を築くのは、領域国家のすることではない。こちらの視点から見ても、大和の王権を倭国の王権とする現行の古代史パラダイムは見直すべきなのである。

ここでの議論は、次の書物で論じたことを補足するものである。日本列島の国家体制については、『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』と『日本国はどのようにして成立したか 王朝交代規範からの推論』で議論し、現行パラダイムに代る見方を提出した。さらに、倭国の王都は太宰府だったとする見方が合理的なことは、『論考 王都太宰府の歴史 王朝交代論が開く視界』で論じた。